

恵那市の伝統芸能を取り巻く現状と課題



吉村 新悟 YOSHIMURA, Shingo

恵那市教育委員会事務局生涯学習課文化振興係長

恵那市職員。平成4（1992）年に旧岩村町職員として採用。平成16（2004）年の市町村合併により恵那市職員となる。事務職員として主に公共用地の取得や施設建設、幼児教育などを担当し、現在の生涯学習課に配属。教育委員会事務局は8年目、うち生涯学習課文化振興係は4年目で、係長として、伝統芸能の保存継承、芸術文化の振興、先人顕彰事業などを担当する。

ABSTRACT

Due to the COVID-19 pandemic, the number of tourist visitors to Ena City, which was 4.09 million in 2018, dropped to 3.07 million in 2020, seriously affecting the tourism industry. The local Kabuki preservation societies, the practitioners of one of the most important tourism resources, were no exception, since most of the regular performance events were canceled or postponed. To relieve this situation, the two historic playhouses utilized city subsidies to refurbish stage equipment and prepared for post-pandemic events. Gifu Prefecture, also in anticipation of tourism in the post-COVID-19 era, released a museum website that archives information on traditional performing arts in the region. In addition, Gifu Prefecture produced a series of Local Kabuki Group Performances in infection-controlled environment in 2021, sometimes without audience, so that 27 groups of the local Kabuki preservation society in the prefecture were able to perform onstage. The performances were filmed and sent to the whole world via YouTube. As a result, the momentum for revitalizing the local Kabuki tradition has increased, and movements that will lead to the reinvigation of the region have begun to appear.

1. はじめに

恵那市は岐阜県の南東部に位置し、愛知県、長野県に隣接する。人口は48,297人（令和4（2022）年2月1日現在）、面積は504.24平方キロメートルで、その76.6%を山林が占める。市内には木曽川や矢作川など、多くの河川が流れ、自然豊かな地域である。生活圏である名古屋市都心からは約60kmである。

恵那市の観光資源は「自然、歴史、文化、食」と大きく4つに分けられ、歴史文化の学びや、四季折々に表情を変える風景、また旬な食べ物を求めて全国各地から観光客が訪れる。主要な観光地は、日本百名城の一つ岩村城跡（図1）、重要伝統的建造物群保存地区の岩村町本通り、国内初の発電用ダムとして造られた大井ダムによる人造湖の恵那峡（図2）、蚕糸を地場産業としていたころの町並みを保存した日本大正村などがある。



図1. 岩村城跡



図2. 恵那峡

当市は昭和・平成の合併前の旧町村を単位とする13の地域自治区によって地域づくりを進めている。観光についても、賑わいと活力があり、愛着と誇りの持てる個性豊かで魅力的な観光交流都市を実現するため、平成19（2007）年に『恵那市観光まちづくり指針』（恵那市2007）を

策定し、令和2（2020）年2月には『恵那市観光ビジョン』を策定し、13地域の資源を活かした多様性・多面性のある観光地づくりを推進し、稼ぐことができる持続可能な観光地を目指してきた。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響により平成30（2018）年度に409万人あった観光入込客数は、令和2（2020）年度には307万人に落ち込み、宿泊施設や飲食店などの観光業界は深刻な状況が続いている。

今回、恵那市教育委員会生涯学習課が受け持つ伝統芸能を新たな観光資源として活用するための取り組みについて紹介する。

2. 新たな観光資源を目指す伝統芸能の現状

恵那地方の地芝居が盛んになったのは江戸時代も終わりに近づいた文化・文政年間（1804年～1830年）で、中山道大井宿には、旅芸人一座が往来するなど、諸芸能に触れる機会も多く、娯楽として地芝居が盛んであった。地元にも地歌舞伎の振付師や浄瑠璃を語る太夫、三味線弾きが誕生し、その後神社の拝殿を舞台形式に建て直すなど地芝居が根付いてきた。江戸時代末期から明治にかけて、各地域の神社の拝殿を使用したり、舞台構えの芝居小屋が造られたりするなど、各地で地芝居が盛んに上演されるようになってきた。その後は村民の集会場・公会堂設置の動きの中で舞台の増改築という形がとられてきた（恵那市1989、1993）。現在は舞台形式の拝殿・籠殿は改修された形跡が残るものの、飯地町の五毛座（図3）（昭和26年建築）と三郷町の宮盛座（昭和28年建築）を残すのみとなった。

市内の伝統芸能には地歌舞伎（図4）、獅子芝居、文楽などが保存会として活動し、その中には県重要無形民俗文化財、市無形民俗文化財として受け継がれている芸能もある。毎年2月に恵那市伝統芸能大会を開催し、市内の芸能を披露している（令和2・3年度は新型コロナウイルス感染症対策のため中止）。他にも市内13地域それぞれの文化祭や発表会が行われ、多くの市民が参加し交流を深めている。



図3. 五毛座



図4. 地歌舞伎

地歌舞伎団体は岐阜県内に32（休会中の団体含む）あり、その多くが東濃地方に集中し、恵那市内には9団体97名が活動している。

3. 恵那市の伝統芸能の課題

恵那市の伝統芸能の課題として、下記3点がある。

- ① 伝統芸能を含む文化活動全般で継承者が高齢化している。
- ② 後継者が不足し、伝統芸能が途絶の危機に面している。
- ③ コロナ禍による発表の中止、活動の制限。

活動するすべての団体に共通する課題であり、市内の地歌舞伎保存会の中でも、休止や保存会同士が協力して上演するなど、会員の高齢化と後継者不足は深刻な問題である。さらに新型コロ

ナウイルス感染症拡大防止のため発表会が中止され、集まつの稽古もできないことから、少し気力も失われているように感じられる。このまま地域の宝である伝統芸能が衰退しないよう、行政と市民、また様々な団体が協同・連携しながら、恵那の伝統文化の保存継承と地域コミュニティの活性化について施策を考える必要がある。

4. 恵那市の施策

平成 28（2016）年に、恵那市総合計画の教育分野におけるマスタープランである『ふるさと・ひとそだて恵那プラン』が策定され、令和 3（2021）年度より後期計画が始まっている（恵那市 2021）。これは【恵那市教育大綱】、【教育振興基本計画】であり、「ふるさとを愛し、学び続ける人を育てる恵那の教育」を基本理念に、幼児教育から学校教育へと 12 年間を途切れなく「主体性、社会性、郷土愛」の育成を図る。このプランの基本目標の一つとして「ふるさとを愛し、誇りに思う心を育む」を掲げ、伝統文化・芸術の伝承により、生まれ育ったふるさとを愛し、誇りに思う心を育む教育を推進している。

伝統芸能に携わる方の裾野を広げ、さらなる後継者の育成を図るための具体的な取り組みを紹介する。

各伝統芸能保存会の会員が、学校のクラブ活動や郷土文化の学習の講師として、児童、生徒に伝統文化を教え、体験する機会を与えている。指導にあたる保存会会員も代々受け継がれてきた芸能を、この先も途切れることなく、次代へ受け継いでくれることを切に願っている。指導者として、恵那市山岡町出身の大歌舞伎俳優、中村いてう氏の存在が大きい。同氏は幼少から祖父で地歌舞伎振付師の故六代目松本団升氏（岐阜県重要無形文化財保持者）などから地歌舞伎を学び、平成 12（2000）年に国立劇場 15 期歌舞伎俳優研修を終了後、平成 13（2001）年に五代目中村勘九郎（十八代目中村勘三郎）に入門した。令和 2（2020）年には恵那観光大使に就任している。いてう氏の協力により、子どもたちを対象に歌舞伎体験講座や学校のクラブ活動での直接指導や、ビデオ・WEB 会議アプリケーションを活用した意見交換会を行った。子どもたちが、大歌舞伎で活躍する先輩の姿に刺激を受け、引き続き地歌舞伎を学び、継承していくことを心から期待したい。

先に紹介した地芝居小屋の五毛座と宮盛座は、花道を備えた舞台や、客席の平土間や棧敷席を設け、公民館機能を兼ねた地芝居小屋である。五毛座については平成 22（2010）年 1 月 15 日に国の登録有形文化財に登録されている。この地芝居小屋はそれぞれの地域で管理しているが、地芝居等が演じられる機会は非常に少ない状況である。行政としての歴史的価値のある 2 棟の地芝居小屋を適切に保存・活用できるよう、地域の代表者や地歌舞伎保存会と協議を行い、令和 2（2020）年に新たな補助事業として、地芝居小屋を活用した観光客誘致と地域の活性化を目的とした事業に対し、事業費の一部を支援することとした。令和 2（2020）年度には、芝居小屋を所有する 2 つの地域が補助金を活用して、舞台の幕や、照明・音響器具を新調し、新型コロナウイルス感染症収束後の地芝居小屋でのイベント開催を見据えた準備を行った。これにより地域の芝居小屋活性化に向けた機運も高まり、あわせて地域の活性化にも繋がる動きが出始めている。

今後も行政としても、芝居小屋を PRするとともに、施設を活用できるような仕組みを市民と共に考えていきたい。

5. 岐阜県、中部大学との連携と支援

(1) 岐阜県からの支援

岐阜県は、県内の伝統芸能の情報をまとめたウェブサイト「地芝居大国ぎふWEBミュージアム」(<https://jishibai.pref.gifu.lg.jp>)を令和2(2020)年度に製作・公開した。県内の自治体と伝統芸能保存会が県へ情報提供し、上演した地芝居等の動画や、各保存会が所有する道具・衣装、芝居小屋等の情報をアーカイブスとして紹介している。

また、令和2(2020)年1月～令和3(2021)年11月にかけて「清流の国ぎふ2020地歌舞伎勢揃い公演」がコロナウイルスの蔓延により日程の変更や延期をしながらも行われ、県内の地歌舞伎保存会27団体が出演し、披露の場を得ることができた。公演では芝居の内容を解説するイヤホンガイドを採用し、初心者にも分かりやすくするなど地歌舞伎の裾野を広げる活動をしている。また、コロナ禍により無観客開催となることもあったが、公演の様子はYouTubeにより全国、全世界へと発信された。この他にも、県内で活動する伝統芸能の各協議会が行う公演会や後継者育成などの活動に対しても、きめ細やかな支援をしている。

(2) 中部大学との連携

令和2(2020)年1月29日に恵那市は中部大学と包括的な連携協定を結んだ。これに基づき、中部大学は「東濃地方の地芝居等文化資源記録保存プロジェクト」により国際人間学研究所の柳谷啓子所長、人文学部日本語日本文化学科の永田典子教授、嘉原優子教授、地域連携センター国際・地域推進部地域連携課の簗島智子課長を中心に、市内の歌舞伎小屋や歌舞伎保存会の調査研究として、過去のVHSテープに記録された映像のデジタル化や、内容分析を行った。また中部大学放送部の撮影協力により、市立三郷小学校の歌舞伎クラブの活動や、大歌舞伎俳優中村いてう氏の歌舞伎体験講座の記録保存ができた。今回の連携により中部大学の皆様の視点から、地歌舞伎の資料調査・研究、データ保存が行われ、後世に残る貴重な資料となった。

6. おわりに

伝統芸能は人と人とのつながりにより育まれ、それぞれの地域にしっかりと根付いてきた。地域の伝統文化に誇りをもちつつも、時代や社会の変化、また観光客などのニーズにも応えながら柔軟に対応しながら継続する必要がある。

現在では人口減少、高齢化により活動の継続が困難になりつつある。後継者育成には、引き続き子供たちが学び、体験する活動を進めるとともに、SNSなどを活用して地芝居の魅力を発信して、新たなファンを獲得しなければならない。また拠点となる地芝居小屋の保存・活用を伝統芸能保存会だけでなく、地域、利用者が一体となって考えることで新たな方策が生まれると考えられる。恵那市の伝統芸能を楽しみに、多くの方が訪れるようになれば、伝統芸能保存会、地域の活力にもなり、後継者の育成そして伝統芸能の保存継承へとつながる。今後のアフターコロナ、ウィズコロナの活動も踏まえ、恵那市の伝統芸能が、新たな観光資源の一つとなるよう、皆様と共に考えて行動に移していきたい。

主要参考文献

恵那市(1989)『恵那市史(通史編)第二巻』
恵那市(1993)『恵那市史(通史編)第三巻(一)下 近現代』
恵那市(2007)『恵那市観光まちづくり指針』
恵那市(2016)『ふるさと・ひとそだて 恵那プラン』
恵那市(2020)『恵那市観光ビジョン』
岐阜県『地芝居大国ぎふWEBミュージアム』最終更新日不明 閲覧日 2022年3月3日 <https://jishibai.pref.gifu.lg.jp>